

東洋文庫所蔵本に押捺された蔵書印について（十六）

— 欧米人の蔵書印 —

中善寺 慎

既刊連載目次

- 一 朝鮮本に押捺された朝鮮の蔵書家の蔵書印 書報35号
- 二 僧侶・寺院の蔵書印、附神官・神社の蔵書印（上） 書報36号
- 三 僧侶・寺院の蔵書印、附神官・神社の蔵書印（下） 書報37号
- 四 国学者の蔵書印（上） 書報38号
- 五 国学者の蔵書印（下） 書報39号
- 六 漢学者・漢詩人の蔵書印 書報40号
- 七 学校・教育機関の蔵書印 書報41号
- 八 医家・本草家の蔵書印 書報42号

- 九 大名・藩主とその家の蔵書印 書報43号
- 十 幕臣・藩士の蔵書印 書報44号
- 十一 戯作者・操觚者・新聞社の蔵書印 書報45号
- 十二 商賈・実業家・企業の蔵書印 書報46号
- 十三 近代の学者・教授の蔵書印 書報47号
- 十四 図書館・博物館とその周辺の蔵書印 書報48号
- 十五 政治家・官僚の蔵書印 書報49号

凡 例

- ・ 印影は縮尺任意の単色写真である。
- ・ 印文の縦の寸法をミリメートルの数字で掲げた。
- ・ 複数の資料に該当蔵書印を見い出せるものは、印影を採集した資料名に*印を付した。
- ・ 資料名につづけて、請求記号を丸括弧に包んで付した。
- ・ 蔵書家の伝記などは主として次の資料に依った。

井上宗雄「ほか」編『日本古典籍書誌学辞典』

- 上田正明「ほか」監修『講談社日本人名大辞典』
岩波書店編集部編『岩波西洋人名辞典』増補版
国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』
国立国会図書館編『人と蔵書と蔵書印』
日外アソシエーツ株式会社編『西洋人物レファレンス事典』
平凡社編『世界名著大事典』
- ・配列は、印記所有者のよみの五十音順とした。



グーリック (Robert Hans van Gulick 一九〇一—一九六七)
 オランダの外交官、東洋学研究者。中国名高羅佩。字は芝
 台。笑忘などと号した。書齋名は集義齋、中和琴室。陸軍中
 将ウィレム・ファン・グーリックの五男として一九一〇年オ
 ランダに生れ、幼年期をインドネシアに過ごす。ライデン大
 学に政治・法律を学び、ユトレヒト大学大学院にサンクリッ
 ト語、中国語、日本語、チベット語などを学び、一九三五年
 に文学博士。駐日オランダ公使館二等書記官となり来日。日
 本研究誌『モニユメンタ・ニッポニカ』創刊に参画した。重
 慶、ニューデリーなどに駐在の後、一九四八年駐日オランダ
 大使館参事官。一九六五年駐日大使兼駐韓特命全権大使。詩
 文を綴り書画を学び、篆刻もよくした。琴および箏の研究で
 も知られ、中国に題材を採った探偵小説の作者でもある。一
 九六七年ハーグにて死去。著書に『琴道』『秘戯図考』『書画
 鑑賞彙編』『長臂猿考』等がある。旧蔵の漢籍コレクション
 は、没後にライデン大学およびボストン大学に寄贈された。

- 〔吟月盒〕(26) 『春夢瑣言』(E-III-1-1-G-1001)
 『高羅佩印』(7) 『Dee Goong An』(III-1-13-C-74)
 *『Dee Goong An』(A-9-11-16-DEO-1001)
 『春夢瑣言』(E-III-1-1-G-1001)



「高羅佩藏（正方）」（24）

* 『国立北平図書館刊四卷三号西夏文專号』

（I—九—A—一〇五〇）

『巴県志』（II—一—B—m—二四二）

「高羅佩藏（長方）」（28）

『巴県志』（II—一—B—m—二四二）



サトウ (Ernest Mason Satow 一八四二—一九二九)

イギリスの外交官、日本学研究者。一八四三年ロンドンに生まれる。日本名佐藤愛之助。号は薩道。ユニバーシティ・カレッジに学ぶ。一八六一年イギリス外務省極東派遣通訳生試験に合格し、翌年に来日。一八八三年に帰国するまでは通訳官・書記官として、一八九五年の再来日から一九〇〇年までは公使として、日本に滞在した。一九〇六年駐清公使を最後に外交官生活から引退して研究に専念し、一九二九年デボンシャーにて死去。著書に『日本耶蘇会刊行書誌』『外交実務案内』がある。蔵書家として知られ、蒐集した古典籍の大半が大英図書館に寄贈されているほか、僚友アストンを経てケンブリッジ大学に約一万冊が、後輩チェンバレンを経て日本大学に数千冊が収められている。また、オックスフォード大学やロンドン大学にもまとまったコレクションが現存する。

〔英国薩道蔵書〕(54)

〔生花早満奈飛〕(IX—一四—七)

* 〔古周易経断〕(三—C—四六)

〔為愚痴物語〕(三—F—a—ろ—八三)

〔清水物語〕(三—F—a—ろ—八八)

〔絵入狂言記〕(三—F—a—一—一六)

〔倭漢書籍考〕(三—M—b—一—二)

〔英国薩道蔵書〕(48) 〔珍銭奇品図録〕(XII—五—D—一—〇〇—二)

蔵書票「ERNEST MASON SATOW / British Legation / YEDO」の貼付されている資料は、東洋文庫の洋書中に左の
二点を見出ししている。

“Canonizzazione Solenne di Ventisette Beati nel 1862”

(XVII-10-E-b-11)

“Relation de l'empire dv Japon” (O-17-A-115)



チェンバレン (Basil Hall Chamberlain 一八五〇—一九三五)
イギリスの言語学者、日本学研究者。号は王堂。一八五〇年、海軍中将ウィリアム・チャールズ・チェンバレンの長男としてポーツマスに生まれる。一八七三年に来日。海軍兵学校教師を経て、一八八六年東京大学文科大学教師として博言学(言語学)を講じた。わが国における近代的国語学の開拓者であり、上田万年はその門下生のひとりである。一九一一年に日本を離れるまで日本語および古典文学の研究に尽くした。アイヌ・琉球に関する研究もある。『英訳古事記』『日本事物誌』等を著わした。スイスのジュネーブに余生を過し、一九三五年レマン湖畔に没す。和漢書の蒐集にも努め、箱根湯本に書庫を設け、王堂文庫と称した。親交のあったアーネスト・サトウから蔵書数千冊を譲られており、「英国薩道蔵書」印が併せ捺されているところから、『古周易経断』『為愚痴物語』『清水物語』『絵入狂言記』がこれに該当するものと思われる。チェンバレンの旧蔵書は、学僕杉浦藤四郎継承分が愛知教育大学附属図書館に、上田万年継承分が日本大学文理学部図書館と神宮文庫に残されている。

東洋文庫収蔵のチェンバレン旧蔵書は、上田万年文庫(一九三八年遺贈)中に一四部五四冊、岩崎久弥寄贈書(岩崎文庫)中に一二件四六冊、そのほか一九四四年購入の和書三六部四一冊などからなる。『経学不厭精』は中山久四郎旧蔵書。

「英王堂藏書」(53)

『經学不厭精』(I—A—三五)

『文公小学』(XI—二—一)

『古周易經斷』(三—C—四六)

『伊勢物語』(三—F—a—i—三六)

『為愚痴物語』(三—F—a—r—八三)

* 『女郎花物語』(三—F—a—r—八七)

『清水物語』(三—F—a—r—八八)

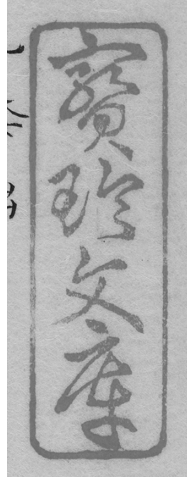
『繪入狂言記』(三—F—a—i—一六)ほか



ハーン (Lafcadio Hearn 一八五〇—一九〇四)
 イギリスの文学者。イギリス軍医のチャールズ・ブッシュ・ハーンとギリシア人の母ローザの子として、ギリシアのレフカス島に出生。幼くしてダブリンに移ったが母と生別し、大伯母に育てられる。イギリスで教育を受け、アメリカに渡り新聞記者で名をなす。一八九〇年、ハーバース・マガジン誌の通信員として来日。翌年に松江の島根県尋常中学校の英語教員となり、同地で小泉節子と結婚し、のちに帰化して小泉八雲と称した。一八九一年に熊本の第五高等中学校に移り、神戸クロニクル社を経て、一八九六年東京帝国大学英文学講師となる。一九〇四年には早稲田大学でも教鞭を執ったが、この年、東京で病没する。墓は雑司ヶ谷霊園。古い日本の風俗人情を世界に紹介し、『知られざる日本の面影』『怪談』などの著書がある。蔵書二千四百余冊は、富山大学のヘルン文庫に収められている。友人であるバジル・ホール・チェンバレンとの親交は深く、ふたりは多くの往復書簡を残しており、掲出書がその一端を詳らかにしている。

「くろく」(10)

“Autograph letters from and to Lafcadio Hearn”
 (MS-811)



ホーレー (Frank Hawley 一九〇六一—一九六一)

イギリスの日本学研究者。一九〇六年イギリス生まれ。ロバプール大学卒業後パリやベルリンで東洋諸言語を学ぶ。一九三一年に東京外国語学校・東京文理科大学の語学教師として来日。第三高等学校でも英語を教授した。一九四〇年に東京の英国情報図書館長に就任するが、翌年第二次世界大戦の開戦により反日活動家として本国に送還される。一九四六年にロンドンタイムスの特派員として再来日。一九五二年には職を辞し京都に隠棲して研究に専念した。『日本における捕鯨』等の著書がある。一九六一年京都山科にて没す。墓は神戸外国人墓地。在日中に和漢の古典籍一万数千冊を蒐集したが、没後の入札会で競売に付されて蔵書は散逸した。天理図書館に和紙関係文献、ハワイ大学に琉球関係文献が収蔵される。蔵書印の文字は盟友ゲーリックの揮毫によるもの。

掲出書のうち『藏乘法数』は、中村菊之進旧蔵書。

「宝玲文庫」(39) 『藏乘法数』(Ⅲ一二—A—八三〇)

『北陸杞憂』(X—五—G—一四五)

『松前家記』(X—五—L—e—一〇六九)

* 『蝦夷葉那志』(XI—五—J—一〇三五)

「宝玲文庫(大)」(58) 『蝦夷記』(XI—五—J—一〇三三)

* 『蝦夷志』(XI—五—J—一〇三四)



ミンズ (Elis Hovell Minns 一八七四—一九五三)

イギリスの考古学者。一八七四年生まれ。ケンブリッジ大学を卒業し、一八九七年からフランス・ロシアに遊学し、北方ユーラシア考古学を専攻した。ロシアでの研究成果や調査報告書類を整理し発展させ、スキト・シベリア文化の原郷を北方ユーラシアと考える説を提唱するなど、スキタイ文化研究を広く世界的な関心にまで引き上げた功績者である。梅原末治は、欧米留学中に知遇を得てのち永く親炙した。一九二七年からケンブリッジ大学教授。一九二八年からはペンブローク・カレッジの学長を務める。言語学者でもあり、また、ナイトの称号を持つ。『スキタイ人とギリシア人』などの著書がある。一九五三年没。

掲出書は梅原末治旧蔵書である。標題紙に著者ミンズの献呈辞が記されているところから、両者の交友が偲ばれる。

「明斯私印」(23)

“The art of the Northern Nomads”

(VI—四—A—一四八)



メツゲル (Ferdinandus W. Metzger) 生没年不詳)

ハンガリーの王立電報通信社特派員。在日ハンガリー公使館通訳官。一九二九年にハンガリーのエイトオクロック紙の特派員として来日。一九三二年に再来日して以降、日本・ハンガリー両国の親善に尽力した。勤務の傍ら独力で洪日辞典の編纂を企図するが第二次世界大戦の勃発により挫折。ペトーフイ・アカデミー会員。主な著書に『洪牙利史』が、訳書に『ペトーフイ詩』『勇士ヤノシユ』『若き英雄トルデイ』がある。在留洪人中の有力者で、両大戦間の日洪関係において重要な役割を演じる。白鳥庫吉とは来日直後より親交があった。横浜市中区本牧に住まう。戦後はアメリカ・ロサンゼルスに移住。

掲出印は奥付に捺された著者検印である。

「目附」(10)

『若き英雄トルデイ』(VII―五―三〇)

* 『洪牙利史』(X―七―一〇〇八)

『洪牙利史』(E―一三―四・七―メツ〇―一〇〇二)

『勇士ヤノシユ』(E―九九三・七―ヘテ〇―一〇〇二)